

当財団は、住まいとコミュニティづくりにとって必要となる施設等の整備のための調査研究、技術開発、デザイン開発、政策提言等を自ら行うとともに、これらの諸活動を行おうとする方々への支援を通じて、個性豊かな住環境の創造に資することを目的に、1992年7月に設立されました。この目的に向けての事業の一つとして、「住まいとコミュニティづくり活動助成事業」を実施しております。

この度、第2回(平成6年度)の助成事業の対象となった10件の一年間の活動を報告書としてまとめました。今回は、昨年から引き続き助成対象となった団体が2件、新規の助成対象団体が8件ありましたが、地域への愛着が強く感じられる活動や民間非営利セクターを明確に意識している活動など、いずれも昨年度同様各地で素晴らしい活動が展開されています。これらの活動団体に提出していただいた要約を、ここに集録しました。活動の様子が少しでも多くの皆様にご理解いただければ幸いです。

終わりになりましたが、地域で実際に活動されている10グループの方々、そして 当助成事業の企画・審査に当たられた小澤紀美子委員長をはじめ審査委員の方々に御 礼申し上げる次第です。

平成7年9月

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

| はじめに | |
|--|-----|
| 助成事業の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 4 |
| 活動概要 1. 函館西部地区における「まちづくり公益信託」の展開 函館からトラスト事務局・・・・・・・ | . 8 |
| 2. 環境共生型居住形態の実現をめざした研究・実践活動 つくばエコ・ビレッジ研究会・・・・・・1 | |
| 3. 「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」 -花と緑のまちづくりセンター設立の試みー 「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会 | 1 6 |
| 4. こまミュージアム創りによる遊び環境と生活文化の創造 高麗の郷エコミュージアム研究会2 | 2 0 |
| 5. 暮らしと自然がある<ヒューマン・スケール>のまちづくり 青山を研究する会2 | 2 3 |
| 6. 住環境指標を活かした新たな住民合意形成の展開と実践 建築協定をきっかけとする街並づくり支援ハウス・・・・・2 | 3 6 |
| 7. 高齢化社会における新しい形のコミュニティの創設 福祉マンション研究会・・・・・3 | 3 0 |
| 8. 放置山林を高齢者の生き甲斐づくりに生かす活動 逗子ハイランド一歩の会・・・・・3 | 3 4 |
| 9. 荻ノ島かやぶき家環状集落の紹介、保全及び活用 荻ノ島わらじ会・・・・・3 | 3 7 |
| 10. ボランティアの活動拠点機能を持つ生涯住宅の建設活動 ライフケア研究会・・・・・・4 | 10 |
| 参考資料 (第2回「住まいとコミュニティづくり活動助成」審査講評)・・・・・・4 | 1 4 |

助成事業の概要

1. 第2回 住まいとコミュニティづくり活動助成 応募要項



ポ2回 「住まいとコミュニティづくり活動助成事業」公募

財団法人ハウジング・アンドコミュニティ財団

ハウジングアンドコミュニティ財団は、住まいとコミュニティづくりにとって 必要となる施設等の整備のための調査研究、技術開発、デザイン開発、政策提言等を自ら行うとともに、 これらの諸活動を行おうとする方々への支援を通じて、 個性豊かな住環境の創造に資することを目的に1992年7月に設立されました。 この目的にむけての一連の事業のひとつとして、住まいとコミュニティづくりについての 民間グループによる先駆的・創造的な活動に対し助成を行います。 意欲に満ちた方々のご応募を期待します。

•助成の対象:

民間の有志グループが行う、住まいとコミュニティづくりに関する下記5項目の活動とします。

[1] 探検・点検型の活動

幅広く住環境の魅力や問題点を発見し、その保全や改善について考えることを通じ、以下の[2][3][4]の基礎となるような活動。

[2] 施設の提案・創造型の活動

子供の遊び場、高齢者のサロン、その他新しい種類の住宅地施設 のあり方について提案し、その実現を目指すような活動。

[3] 住環境の保全・整備型の活動

緑化の促進、建物の保存、屋外工作物の整備、その他環境の維持 管理などについて提案し、その実現を目指すような活動。

[4] 自然の保護・活用型の活動

地形、水系、動植物等を保護し、住環境に生かす方策などについて 提案し、その実現を目指すような活動。

[5] その他の活動

上記[1]-[4]以外で住環境の具体的な保全、改善、創造に関するあらゆる活動。

活動の対象となる領域は数戸の住宅群あるいは単独の住宅地 施設から小学校区程度の住宅地[住商・住工混在地を含む]としま す。また活動のグループについては、住民や専門家も含めた多様な 人が参加することが望まれますが、参加者の人数や資格についての 制約はありません。

なお次のような活動は助成の対象となりません。

- ・著しく政治・イデオロギー・宗教・営利などの目的に偏するもの
- •特定の事業の反対運動を目的としたもの
- ・実質的に完了しているもの

•助成の概要:

1. 助成金

1件当たり200万円を上限とし、総額1,000万円を予定しています。

2. 助成の決定

助成の対象は、住まいとコミュニティ活動助成選考委員会にて慎重・ 厳正に選考のうえ、2月開催予定の理事会にて決定します。これらの 連絡は、申請者各々に文書にて3月下旬に行います。

3. 助成の期間

1994年4月1日より、1995年3月31日までの1年間とします。なお継続して助成することがありますが、この場合も各年ごとにあらためて申請し、選考を受けることとします。

4. 助成の実施

助成を受けるグループの代表者は、財団と覚書を交換し、これにもと づいて計画を実施することとします。助成開始半年後に経過報告 書および中間会計報告書を、助成完了時に報告書および活動記 録として30分程度の手製のビデオテープと会計報告書を提出して いただきます。

なお、助成金は、原則として覚書取り交わし1カ月後に50%、中間報告終了後に50%を支払います。

•選考委員会·選考基準

1. 選考委員会

選考は下記の選考委員会にて行います。

住まいとコミュニティづくり活動助成選考委員会

委員長 小澤紀美子[東京学芸大学]

- 委 員 泉 宏佳[住宅·都市整備公団]
- 委 員 小林秀樹[建設省建築研究所]
- 委 員 笹井俊克[建設省住宅局]
- 委 員 髙田光雄[京都大学]
- 委 員 水谷達郎[住宅金融公庫]
- 委 員 森反章夫[東京経済大学]
- 委 員 山岡義典[助成活動プログラム・コンサルタント]

2. 選考基準等

選考基準は次のとおりです。

- [1]個性豊かな住環境の創造に貢献するものであること。
- [2] 先駆的かつ創造的な活動であること。
- [3] 公益性が高く、かつ民間グループが取り組むに、ふさわしい活動 であること。
- [4]計画を実行する際の適切な人材の確保等、活動遂行能力が 充分であること。

•応募手続

1. 応募方法等

所定の申請用紙に必要事項を記入の上、当財団「活動助成係」 宛、書留でお送り下さい。この場合、記載紙面の追加および規格外 の用紙の使用は認められません。ワープロ文字を用紙に貼り付ける ことはかまいません。また、グループの会報など、活動内容に関連す る資料があれば添付して下さい。

なお、書類整理の都合上、直接財団への持参はご遠慮下さい。 2. 応募期間

1993年10月1日から12月15日まで[当日消印有効]。

応募先:

〒107 東京都港区赤坂3-21-20 赤坂ロングビーチビル4階 財団法人 ハウジングアンドコミュニティ財団「活動助成」係 tel.03-3586-4869

3. 選考結果の発表

選考の結果は、3月下旬に各々文書にてご連絡いたします。またご提出いただきました申請書や添付資料等は、返却致しかねますので、 予めご承知おき下さい。

参考:

ハウジングアンドコミュニティ財団の概要 設立: 1992年7月17日

基本財産:5億円

出捐者: 株式会社 長谷エコーホレーション

主務官庁:建設省 会長:競海泉一郎

安長: 鍼海貝一即 理事長: 合田耕平

再務理事:鎌田宜夫

2. 公募審查日程

93年10月 1日~12月15日 申請書の受付

94年 1月12日~19日

予備審査(委員各自による審査)

1月24日

選考委員会(助成対象候補の決定)

3月 3日

理事会 (助成対象の決定)

3. 審查結果一覧表

| 活動のテーマ | | |
|--|------------|-------|
| 活動グループ名 | 活動の対象地域 | 助成金額 |
| 1. 函館西部地区における「まちづくり公益信託」の展開 | | |
| 函館からトラスト事務局 | 北海道函館市 | 120万円 |
| 2. 環境共生型居住形態の実現をめざした研究・実践活動 | | |
| つくばエコ・ビレッジ研究会 | 茨城県つくば市 | 150万円 |
| 3.「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」 一花と緑のまちづくりセンター設立 | 立の試み一 | |
| 「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会 | 茨城県つくば市 | 80 万円 |
| 4. こまミュージアム創りによる遊び環境と生活文化の創造 | | |
| 高麗の郷エコミュージアム研究会 | 埼玉県日高市、飯能市 | 70万円 |
| 5. 暮らしと自然があるくヒューマン・スケール>のまちづくり | | |
| 青山を研究する会 | 東京都港区 | 50万円 |
| 6. 住環境指標を活かした新たな住民合意形成の展開と実践 | | |
| 建築協定をきっかけとした街並づくり支援ハウス | 東京世田谷区 | 150万円 |
| 7. 高齢化社会における新しい形のコミュニティの創設 | | |
| 福祉マンション研究会 | 神奈川県横浜市 | 100万円 |
| 8. 放置山林を高齢者の生き甲斐づくりに生かす活動 | | |
| 逗子ハイランドまちづくり会 | 神奈川県逗子市 | 60 万円 |
| 9. 荻ノ島かやぶき家環状集落の紹介、保全及び活用 | | |
| 荻ノ島わらじ会 | 新潟県刈羽郡高柳町 | 120万円 |
| 10. ボランティアの活動拠点機能を持つ生涯住宅の建設活動 | | |
| ライフケア研究会 | 兵庫県神戸市 | 100万円 |

4. 助成事業実施経過

助成期間:94年4月1日~95年3月31日

覚書の取り交わし。財団から助成金の50%を給付。 9 4 年 4 月

10月 助成対象グループから財団へ中間報告書を提出。

財団から助成金の50%を給付。 11月

助成対象グループから財団へ助成事業完了報告書を提出。 95年 4月

活動概要

1. 函館西部地区における「まちづくり公益信託」の展開

函館からトラスト事務局 (北海道函館市)

1. 活動の目標

函館山の麓、西部地区といわれる元町界隈の歴史的町並みと港の伸びやかな風景の街で、市民の新しいまちづくりの仕組み「まちづくり公益信託」が1993年(平成5年)6月誕生した。函館色彩まちづくり基金は公益信託として新たな試みである常設の運営事務局「函館からトラスト事務局」を設置している。本活動は、この函館からトラスト事務局の活動を通して、函館におけるまちづくり公益信託の展開の方法論をさぐり、市民まちづくり活動の新たな地平を開拓することにある。

そのテーマは5つほどある。

- ■公益信託の創造的な運営体制とはなにか、そのなかでの事務局の役割はなにか
- ●助成団体の活動をどのように支援し、活性化させうるか
- ●地域におけるまちづくり公益信託をどうやってひろく認識してもらうか
- ●地域におけるまちづくり公益信託はなにをめざすべきか
- ●地域におけるこれからのまちづくりの方法とは

Ⅱ. 活動の内容

1. 開かれた運営体制

函館方式の開かれた運営方法とは、運営委員会の審査内容の詳細な発表(ニュース「から」で報告)、年2回の助成活動公開報告会の開催、基金活動の定期的なニュース「から」等による情報提供、の3つを基本とした。活動は予定通り進行しており、そのスタイルが定着しつつある。そのなかで事務局の仕事としては、助成活動の事務、基金のニュースレターによる情報交流、報告会の開催、成果の発表、募金活動のプロモート、等々、やろうと思えばいくらでも仕事はあるといえるものであった。

●ある程度成果の見える助成金を捻出するため、設立初年度の募金を重点目標とした。

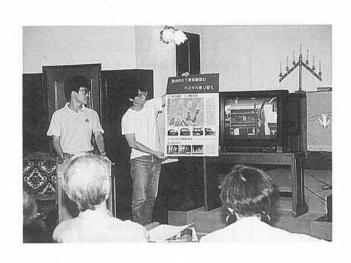
2. 助成団体の活動をどのように支援し、活性化させうるか

第1回の助成として函館色彩まちづくり基金の助成活動は平成6年2月の運営委員会で、8件の応募のなかから4団体、総額70万円が選ばれた。最終報告にみるその活動内容は、予想以上の成果をあげたものが多く、じつに充実したものとなった。助成活動が活性化したポイントは、もちろん助成各グループが自覚をもって、意欲的に取り組んだことがあげられるが、事務局運営との関連でまとめると以下の点があげられる。

- ●中間報告会、最終報告会、3ヶ月毎の活動記録の提出などは助成対象グループにとっては負担になった部分もあるが、助成活動をうまいタイミングで誘導、刺激する材料となった。
- ●報告会(特に中間報告会)は活動グループが他の活動を知る機会となり、活動グループの刺激や活動方法を学習する機会につながった。
- ●基金がマスコミにとりあげられることが多く、助成活動が社会的に注目されるものであることを感じさせた。事務局が発行するニュースペーパー「から」もそういう役割のなかで、活動の社会化、情報交換などの役割で貢献した。



ニュースペーパー「から」



助成団体の中間報告会

3. まちづくり公益信託をどうやってひろく認識してもらうか

函館色彩まちづくり基金の規模は2,000万円で小さく、募金活動が課題である。その点で、チャリティコンサート、チャリティ茶話会などのイベント的な募金拡大の活動 (Fund Raising) がからトラスト事務局を中心に始まり、草の根から市民に浸透していく方法がスタートした。また様々な交流を通して函館外にも基金の幅広いサポーターづくりをおこなっている。

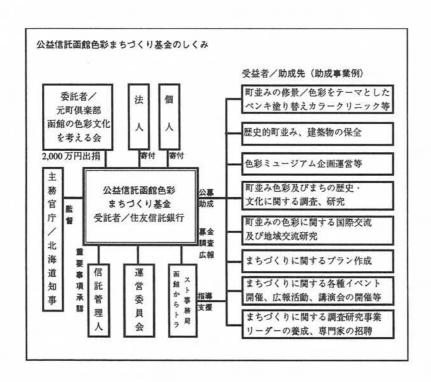
4. 地域におけるまちづくり公益信託はなにをめざすべきか

公益信託がスタートして1年目をすぎ、その目標像として函館におけるまちづくり公益信託は、 地域における様々な市民活動の受け皿として市民、集団、時には行政も含めた各主体と地域のカ タリスト (触媒) として機能することがおぼろげながら見えてきた段階にあるといえよう。その 実現は今後の課題である。

5. 地域におけるこれからのまちづくりの方法とは

基金助成団体は、興味深いまちづくり活動を函館市西部地区を中心に活動し、それぞれの活動が反対運動ではなく、自主的な提案による活動であった。また函館からトラスト事務局でも、基金を活用したまちづくり活動のモデルとして、まちづくりを地域住民と一緒になって考えるワークショップの手法を駆使し、住環境整備と歴史的町並み保存両立の課題を明らかにするプロジェクトを行なった。

従来住民のまちづくりというと、なにか課題や反対目標が生まれ、やむにやまれず立ち上がるというタイプの運動が多かったが、市民サイドで自主的にまちづくりのテーマを設定して住民が自ら考えていく活動は、これからの住民主体のまちづくりにとって重要な点であろう。その意味で函館での新しいまちづくりの動きへの萌芽という意味で、有意義な問題提起がなされ、今後はどう成果に結びつけていけるかが課題となる。



Ⅲ、まとめ一課題にかえて

1. 市民のまちづくり活動の幅の広がりとネットワーク化

基金事務局は函館からトラスト事務局という市民グループから構成される。従来から函館の様々なまちづくりにかかわってきた専門家、市民活動家、行政マンなどがすべて市民ボランティアとしての立場あるいは、新たなまちづくり市民活動の一貫としてかかわっている。従来ある目的(たとえば、歴史的建造物や歴史的景観の保全運動にかかわってきた)の市民活動を行うことでまちへのかかわりやこだわりを示してきたメンバーが、他のまちづくり活動を行う市民グループを支援することで、いわば間接的にまちづくりを行うなかで、従来見えなかった視点からまちづくりを見始めたといえよう。

それは、市民がまちづくりやそれに関わる主体を相対化してみる契機になった。市民グループがより幅広くまちづくりを捉え直し、将来的には市民活動がまちの全体や動き、将来を見ながら戦略的にまちづくり活動を行うことにつながっていく可能性が見えてきたともいえる。しかし活動を目に見える成果として、実現化していく段階はこれから様々に試行錯誤していかなければならない課題である。

2. 運営事務局のボランティアとしての限界

活動の実質1年目として、上記のような様々な成果をあげつつあるが、函館からトラスト事務 局にも課題が多い。ひとつはニュースの発行など、様々な費用がかかるが、現時点ではハウジン グアンドコミュニティ財団からの助成金でまかなっている。今後自主財源をどうやって恒常的に 確保していくか。

二つめの課題は事務局が札幌と函館にわかれているため、会議など限られた時にしかできなくてなかなか意志疎通をとることが難しい面である。このことに関しては一方、対銀行(信託銀行は札幌に支店がある)や対道庁(監督官庁)などの面での好都合な面や、札幌は専門家的なチーム、函館は住民サイドのチームということでうまく役割分担をはかって、全体として活動が大きく活発化している側面も指摘できる。札幌はニュースの発行などにおいて専門的な技術やノウハウをもったスタッフや拠点が存在している。函館にそういうスタッフや拠点を確保することも今後は必要となろう。いずれにせよ札幌、函館の2拠点体制を今後もうまく続けていけるか課題はある。

三つめの課題は事務局メンバーになかなか新しいメンバーが増えていかないこと。札幌、函館いずれも以前から元町倶楽部に関わってきたメンバー(つまりは委託者に関わるグループ)が中心であり、固定化しつつある。今後は基金が助成したグループや市民ボランティアなどからも運営事務局にも参加するメンバーをふやしていく必要がある。

2. つくばエコ・ビレッジ研究会

環境共生型居住形態の実現をめざした研究・実践活動 (茨城県つくば市)

1. つくばの田園住居を提案しています一環境共生

「エコビレッジ」は、エコロジー(生き物を取り囲む環境の体系)とビレッジ(むら)という言葉を結びつけた造語です。エコビレッジ(自然や歴史と共生する住まい方)は、田園環境の中で、豊かでワクワクする暮らしを目指しています。

つくばは、首都圏の一翼を担う国際都市として、約30年前から整備されたまちです。そして 同時に、筑波山が象徴する穏やかな気候風土に恵まれながら、数千年の歴史を積み重ねてきた地 域でもあります。

今、開発の影響力の強いつくばでは、都市とか農村とか分けて地域づくりを考えるのではなく、 <田園環境をいかし高める>を共通テーマにしたまちづくりが求められています。私たちは、集 落の人口減、老齢化、後継者不足などの問題や、学園地区に住む住民が持ち家を農村に持ちたい という欲求のあるつくばという場所(フィールド)で、田園居住を提案しています。

II. 市民のたくさんの声と出会いを大切に活動しています--市民発想

つくばエコビレッジ研究会は、平成4年、農村居住に関心のある者がつくばJC主催の「街づくり塾」をきっかけに集まって発足し、アンケートや学習会、現地調査会などで集めた市民の声と研究の成果をもとに、エコビレッジ実現について検討してきました。

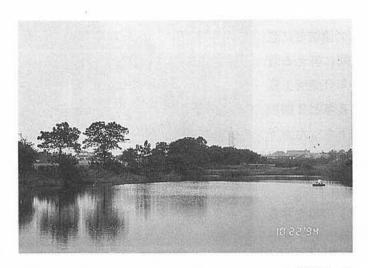
研究会の会員は20名弱ですが、私たちの活動は数百におよぶ方々の声に支えられています。 中でもこれまでの成果は、つくば市若森地区の住民の方々の協力を頂きながらまとめられました。 また、平成6年度は、財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団の助成援助を受け、エコビ レッジ基本計画をまとめることができました。

私たちはこうしたひとつ一つの出会いをゆっくり暖めながら、着実にエコビレッジづくりを進めています。実現までには、多くの方のご意見やご協力を必要しています。エコビレッジに暮らしたいと思う方にはぜひ、感じることを伝え、簡単なことから実現に参加していただきたいと思います。

Ⅲ. 持続的な環境づくりを検討しています―継続的展開

エコビレッジは、自然の回復力や、地域社会(コミュニティ)、土地利用など集落の収容力(キャパシティ)を基本とした人口定着や開発を検討し、田園環境を持続的に支える仕組みの実現を目指します。集落にとっての第一条件は農業を育てることです。田園環境を支え、農村文化を伝えるために、やる気のでる農業の環境づくり、生活環境の向上が重視されます。

エコビレッジが対応する課題は、環境問題、教育や医療・福祉、勤め先や交通、土地問題など 多岐にわたります。将来は、エコビレッジの活動が全国のまちづくりに関する市民活動とつな がっていくことが展望されます。



若森地区の池

IV. 地域に根ざしたエコビレッジを実践していますープロセス重視

私たちは、都市住民の多くの要望に答えるべく、農村に住む条件を整えます。住みつき、都市 と農村が共に生きるつながりをもつことによって、地物を食べ、ヤマを利用し、作物を育てるな ど豊かな田園の暮らしを実現させます。

エコビレッジづくりは、これまで田園環境にかかわってきた地域が主体となります。人が住みつくことは、集落にとって新しい風を吹き込む効果もあります。人が入ってくることへの不安は時間をかけることによって解決されますが、これまで得た技術や各地の事例などをもとに、私たちも支援組織づくりや人材の育成など、地域と外をつなぐお手伝いをして参ります。

V. 活動の内容

研究会では、以下のような企画を開催し、エコビレッジの内容を詰めながら、田園への住み手 集めと実現する集落の準備を進めています。

○公開セミナー

各専門の先生を囲んで行う勉強会を行っています。これまで、クラインガルテン(市民農園) の専門家の金丸三郎氏や、農村研究の専門家の鎌田元弘氏などをお招きしました。

○田園の暮らしカルチャー講座

現地見学会と公開セミナーを組み合わせた企画を行っています。郷土研究家など地元の講師 を毎回お招きしています。また、なるべく多くの方々が田園の暮らしに関心を持つように、俳 句会や利き水会、鍋を囲んだパーティなど楽しい催し物を併せて開催しました。これまで各回 $10\sim20$ 人程度の参加がありました。

○シンポジウム

エコビレッジに関する話題について数人の講演者に意見をいただき、会場に集まった方々の質問に答える討論会を行っています。これまで、つくば青年会議所主催のつくば市民会議の一環として平成5、6年と2回のシンポジウムを開催しました。集まって下さった方々は延べ約200人になります。

○パネル展示

私たちの構想としてまとめたエコビレッジの絵や写真などを紹介しています。つくば最大のショッピングセンター「クレオ」でのアースデイ企画に参加したのを始め、シンポジウムなど機会ある度に紹介しています。



現地の見学会

〇アンケート

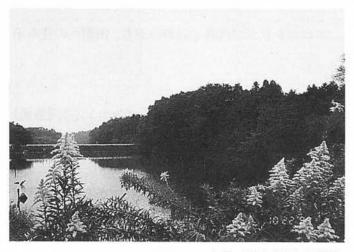
田園の暮らしカルチャー講座等は、地元情報誌を通じ広く参加者を募集しています。集まった方々のご意見を集約するため、私たちは随時アンケートを実施し、エコビレッジ基本計画に 反映させています。これまで50名以上のご意見を集めることができました。

○地元懇談会

地元の住民の方が集まる地区総会等の公的な場所をお借りして、随時、地元懇談会を開催しています。地元住民の方々との交流を深めるとともに、私たちの研究に対するご意見や感想を承っています。これまでつくば市若森地区で行ってきました。

○定例会

毎月1回、研究会の運営を円滑に進めるための打ち合わせを行っています。この他にも、カルチャー講座の下見会など必要に応じて会員が交流する機会をつくっています。



水辺の田園生活を目指す

VI. 今後の活動予定

今後は、提案を実現につなげる以下の活動を実施していく予定です。

○セミナーの開催等

より多くの方へエコビレッジを知っていただくために、引き続きセミナー、シンポジウム等 を開催します。また、行政その他関係機関との親睦を深めます。

○エコビレッジ絵本の作成

対象地域との交流を深めるため、地元高齢者等への聞き取りにより地域資源(ため池、郷土料理など)を主題にした絵本を作成します。

○実施計画の立案作業

エコビレッジの具体化を図る区域と手法を選定し、実施計画案をまとめます。

○実施検討会の開催

基本計画をもとに地元懇談会を開催し、既存集落の住民と居住希望者の意見調整をします。 また、実現のための新たな事業主体を検討します。

3. 「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」(継続2年目) 一花と緑のまちづくりセンター設立の試み一

「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会 (茨城県つくば市)

1. 活動の目的と背景

助成を受けて二年目の「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会活動が始まりました。一年目の活動は、「花と緑が好きな女性たちが、地域の公園の手入れを仕事として請け負ったらどうだろう。そうすれば、公園が地域の交流の場としてもっと生かされるし、公園もそれぞれ個性的になる。また公園で花や緑についての講座を開くことによって、周辺の住宅の庭を美しくすることもできる」というのが、コンセプトでした。

ところが、その活動を通じ、公園と市民の活動とが結びつくのには、まだまだ障壁があり、まずそこを変える必要があることに気がつきました。

つくば市の場合、112もある公園は、市、県、住宅・都市整備公団が管理しています。そのうち市の管轄下の公園が最も多いのですが、それを3人の公園係の職員が管理している現状では、業者に委託し、大過なく管理されるように指導する以上のことを求めるのは不可能です。しかし、このたくさんの公園と48キロにおよぶ歩行者専用道路を、市民が使いこなせる場にすることで、市民のあいだのコミュニケーションはずっと良くなるはずです。

そこで、「まち中の緑をつなぐ」ことが二年目の目標となりました。

「庭」に着目 「庭」は最も身近な緑の環境。つくば市の今はまだ豊かな緑をどんなふうに大切にしていくか、「庭」に焦点を絞って考えてみる。

「庭」の公共性 集落の庭園、新しい住宅団地の庭、集合住宅の庭…どの庭にも公共性がある。

「庭」をつなぐ いろいろな庭の持つ公共性を新しい形でつないでいく。集落の庭園での庭師講 座。各家庭で苗を育て、公園に皆でデザインした花壇を etc.

「庭」をつなぐことは、「人」をつなぐこと。

「庭」で働く 緑の中で働きたい市民はいっぱい。ある時にはボランティアで、ある時には応 分の報酬を得て、ある時にはプロとして。新しい働き方の実験。

「庭」の可能性 剪定枝を土壌改良や水質改良に使う炭にする。家庭の生ごみを集めて堆肥化。 環境問題解決の糸口は「庭」にあり。

それができるためには、何が必要か。わたしたちは、それを「花と緑のまちづくりセンター」とでも名付けるべき、日本型NPOだと思いました。



「花のおがわ」の手入れ

Ⅱ. 活動の内容

「花と緑のまちづくりセンター」の業務内容を想定し、その中でできそうなことから始めてみることにしました。

- 1. 公園内にコミュニティー・ガーデンをつくり、そこで市民の花壇づくりなどの指導をする。
- 2. 老人、身障者世帯の庭の管理。集落の大きすぎて手入れの届かない庭の手入れ。
- 3. 花と緑のネットワークの形成と運営。

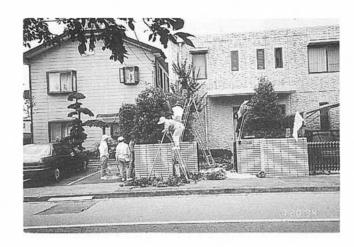
1も2も、結局は3と同じく、花と緑を通して市民の間にコミュニティーを育てることにつながります。

まず、昨年つくった「花のおがわ」のわきにハーブガーデンをつくりました。ハーブの種類を 決め、花壇のデザインをして苗を植え込み、キッチンハーブガーデン、コンテナガーデン三種な ど、充実のハーブガーデンができました。月桂樹を植樹したり、敷石を市松模様に剥がして、そ の下が砂地だったのでタイムなど乾燥を好む種類を植え込んだり、かなり大胆なことをしました が、そこまでできないと「庭」づくりは面白くありません。市の方でも、昨年度の実績があった ので、「(何をやるにしても)良識の範囲内でしょうからね」と黙認してくれました。

次に、ホワイトガーデンをつくろうという声があがりました。白い花ばかりを選び、秋に皆で 種蒔きをしました。そして各自の庭やベランダで苗を育て、春、持ち寄って植え込んで、そして 今、白い花が花盛りです。

また、「花のおがわ」のその後ですが、日当たりが悪いせいか、春が来てよそでは花が咲きこぼれているのに、まだ咲かない、まだ草ばかり、と思っていたら、ある時一斉にジギタリスが咲き始めました。背が高いジギタリスは遠くからでもよく見えるため、これまでになく人々が寄ってきて、賛嘆の声しきり。一頃は、その一角だけ、異次元にまよいこんだかと思わせる雰囲気を漂わせていました。新聞にも取り上げられたため、仲間にはいりたいという声がまた続々と届いています。

民家を借りての剪定講座





2 については、今年は、剪定講座に使う庭を公募してみることにしました。それによって、どんな人が庭の手入れに困っているのか、どんな助けが必要なのかを見ることもできると思ったからです。

私たちの委員会が、剪定の勉強に使う庭を探しているという記事が出たとたん、堰を切ったようにはがきが届き、電話の問い合わせが相次ぎました。中には、ただで手入れをしてくれるのならもっけの幸い、というようなのもありましたが、たいていは、「老人家庭で庭の手入れに困惑していた」とか、「この機会に自分も学びたいので」など、私たちが想定した動機から応募してくれた方でした。締切の頃には、応募は450通にもおよび、反響があまりにも大きかったため、会の運営が不安定になった時期でもありました。このことを通じて、NPOのあり方についてつきつめて考えざるを得ず、結局はこれが今年の最大の収穫となったように思います。実際の講座は五回行ないました。

3については、「花と緑つうしん」を毎月発行し、庭見学会と講演会を二回(浅海義治さんの『NPOについて』と正木覚さんの『暮らしの中の植物』)行ないました。「花と緑つうしん」は、予算の関係もあり、内部での情報交換にとどまってしまいましたが、講演会では、講師の方たちや他の市民団体とも交流が持て、有意義でした。



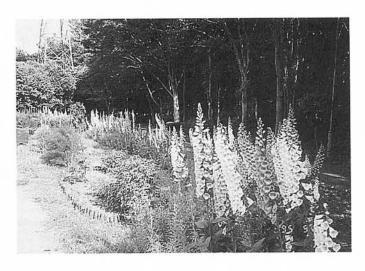
子どもたちもお母さんの指導で頼もしい働きぶり

Ⅲ. 活動の成果と今後の課題

「庭」を公募したとき、その反響があまりにも大きかったので、会の内部に動揺が起こりました。『無料で手入れする』ことに対し、本職の庭師さんたちからの反発があり、既に庭師さんのもとで働き始めていた一部のメンバーたちは、直接その反発を受けとめなくてはならなかったからです。

そのときに、はっきりわかったことは、「先駆的、創造的、継続的でしかも広がりのある」市民活動においては、全体をマネージする「核」の存在が不可欠であることです。もっとも、上記のような市民活動である=「核」が存在している、ということなので、「核」の存在が意識される必要がある、と言い換えたほうがいいかもしれません。

私たちの場合に即して言うと、「庭」を公募するとき、「核」が広報し、その責任も全面的に負えば、動揺は起こらなかったのです。この「核」というのが、即ちNPOです。「核」のまわりにいてこの活動に関わっている人たちは、いかに熱心でも、それぞれの立場からこの活動を見ているにすぎません。この活動全般を見通して、次に進むべき方向を見定め、まわりにも情報を発信しながら、一歩一歩進んでいく…この基本は「核」がやるべきで、そのことがまわりからも認識されていなくてはならない。そのためには、「核」は無報酬であってはならない。これは単純なようでいて、NPOの鉄則だと思います。この点がクリアされて初めて、学者や専門家の趣味、退職者や主婦の無料奉仕による市民活動からNPOへと脱皮することができるという確信を持ちました。



4. こまミュージアム創りによる遊び環境と生活文化の創造

高麗の郷エコミュージアム研究会 (埼玉県日高市、飯能市)

1. 活動の背景と目的

活動の主体は、身近な自然環境の破壊に危機感をもった住民たちが、自分達の地域を、地域全体の自然環境・住環境・生活文化遺産等をそのまま保全し生涯学習の場として整備する「エコミュージアム」にしようと1992年に発足した「高麗の郷エコミュージアム研究会」である。同研究会では、高麗の郷の名に関連する伝統文化であるこま遊びについて学習した結果、まちづくり活動と連動した「こまミュージアム」を作ろうという動きに至った。

「こまミュージアム」とは、建築としての博物館(ミュージアム)の施設のことではない。地域 内の路地や蔵、土間、神社、大樹の下など様々な場所において、独楽の展示・実演などを行うこ とによって、地域環境と生活遊び文化を学習する活動のことである。

ここでは、「こま」という言葉をキーワードにして、地域づくりを進めようとしている。つまり、全世代が同時に興じ得る「独楽(こま)」遊びを通じて、住民が現在、「高麗(こま)」の郷における生活者であることの自覚を呼び覚まし、地域資源の再発見、世代間交流、地域の活性化を図ることが、活動全体を通じての目的である。今年度の活動の具体的な目標としては、様々な遊びを通じたワークショップとイベントを開催し、「こま」を地域の人たちの交流と地域学習のきっかけとすることがあげられる。

Ⅱ. 活動の内容と方法

今年度は、以下に示す「ワークショップ」と、その結果 として企画運営される「こま回し大会」を主要な活動とす る。

1. ワークショップ (こまによるまちづくりイベント)

路地裏と「こま」(独楽と高麗) について、体験的に学習をするワークショップを連続して開催し、地域の住民が身近な路地空間と伝統的そと遊びを再発見できるきっかけとする。住民自らが、手を動かし、話し合い、講演を聴き、共に遊び、探検や発見を繰り返しながら、地域に対する提案をまとめあげていくものとする。また、各回ワークショップの記録・成果は、地域の商店街のイベント時に展示する。



路地裏のコマ回し教室



こま五輪での大独楽回し

2. 路地裏こま回し大会(こまリンピック、こま五輪と呼称)

地域内の路地裏や広場、蔵、土間、神社、大樹の下など様々な場所で、独楽の展示・実演など を行うことで地域環境と生活遊び文化を学習する。

Ⅲ. 活動の実施経過

1) こまミュージアムワークショップ (3回) の実施

第1回こまミュージアムワークショップ

日 時:1994年7月17日

会 場:飯能市郷土館学習室、および「こま横町」周辺の路地裏

テーマ:路地裏探検 路地裏を再発見する

第2回こまミュージアムワークショップ

日 時:1994年9月25日

会 場:飯能市郷土館学習室、および周辺地域の丘陵

テーマ:こまと遊びを考える

第3回こまミュージアムワークショップ

日 時:1994年11月12日

会 場:飯能商工会館会議室、および「こま横町」周辺の路地裏

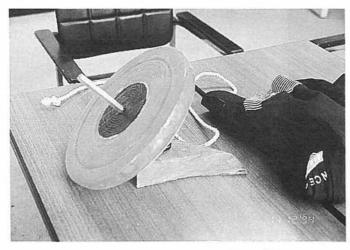
テーマ: 「こま五輪」の企画立案

2) こま回し大会の実施

日 時:12月4日(日)

場 所:飯能商工会館 駐車場付近 (メイン会場)

時間帯やコーナーを設け、会場と周辺の路地裏で、様々なイベントをおこなった。







名人による引っかけ独楽の芸

IV. 活動から得られたものと今後の課題

参加者はもとより、地域住民が、それぞれ今まで身近な環境と懐かしい遊び文化を再発見する 楽しみを得たように思われる。

ワークショップの効果としては、参加者の感想によると、裸足で歩き地域を探検するなど、ふだん日常生活では不可能な体験が得られ、それを通じて環境を見直すことができた点にある。また今回のワークショップに参加して、改めて路地裏に興味を抱いた人も多かった。

こま回し大会の効果としては、さらに多くの人々の参加が得られ、こまを使ったイベントを通じて、地域の住民に地域の活力を再認識させた点があげられる。これまでは、神社の境内などでおこなわれることが多かったが、今回のように路地裏に接した街中でおこなわれることの重要性が再確認できた。

さらに、今後の課題としては、さらに街を再発見するための学習を、限られた参加者ではなく、 もっと一般の住民を交えておこなっていくことが必要である。子どもの参加を促す上で、とくに 学校との活動の連携が必要となろう。

また、こまミュージアム設立が現実的に見込まれており、この施設の具体的な運営や、その予定地となる場所の地域性の学習、また、今回展開された路地裏周辺との関係性などが今後の検討事項として挙げられる。

5. 暮らしと自然がある〈ヒューマン・スケール〉のまちづくり

青山を研究する会 (東京都港区)

東京オリンピック開催の5年前、窓から見える青山墓地の風景に惹かれて、住まいをかまえま した。みどりの杜が、南から東へ、東から北へとパノラマにひろがる借景がありました。

以来、35年間、変わりゆく青山を目のあたりに見て参りました。そうした中で、80年代半ばからのバブル期の乱開発は、私にとって衝撃的な出来事でした。地上げ、底地買いの横行 → 住宅がこわされる → 庭木が倒される → 空地になる → オフィス・ビルが建つ。周辺が急速に変わっていきました。

しかし、私の家と周りの一角は、複雑に入り組んだ地形が幸いしてか、からくも乱開発からのがれることができました。あらためて、身の回りをながめますと、まだ残されている宝物があることに気がつきました。パノラマにひろがる風景はなくなりましたが、青山墓地の緑の空間を感じることはできるのです。それは、朝の目覚めどき、墓地をねぐらにする雀の啼き声をきくときに感じます。

家を一歩でると、そこは路地の空間です。高低起伏する 大地がつくる坂や階段、車の入らない路地こそ、私が住む マチの基盤です。

路地には、樹木や草花、花の中を飛び交う花アブや蝶、グレープ・フルーツの葉を食べる青虫、青虫を食べるガマガエル、雨上がりに這うカタツムリ、の植物や小動物をみることができます。

路地は、生物が生息するのに適したビオトープ空間なのです。つまり、人間の生存にも適していることがわかります。このように、生物としての私たち人間が生きていく基盤である<自然>がまだ残されていることがわかります。

私ども「青山を研究する会」では、近隣に住む方々の協力をえて、残された宝物である<生活環境の質>を調査することにいたしました。



ヒューマンスケールの空間

今後、都市化の進む中にあって、開発の方法がより問われることになると思います。開発の方法は正しいか、環境変化に異常はないか。私どもの調査・研究は、それらを判断する指針となるかとも考えます。

以下に、私どもの住む長者丸通り北東部における<自然環境の質>の調査・研究の項目を箇条 書きいたします。

1. 長者丸通り、坂のある私の街

- 1) 長者丸通りの自然
 - ・等高線でみる三つの舌状台地
 - ・高低起伏する我が家のまわり
 - ・段坂のある風景
 - ・車が通らない路地空間
 - ・地形に導かれた敷地割と建物(起伏する大地がつくる敷地割と建物)
 - ・ケバ描き地図でみる湧き水と井戸
- 2) 青山墓地と根津美術館の自然の度合いを、
 - ・青山墓地の井戸のあとから調べる。
 - ・青山墓地の樹木と表土から自然の度合いを推測する。
 - ・根津美術館の湧き水と池を観察する。多孔質空間とビオトープ空間。

2. 私の庭

- 1) 路地に沿った1メートルの幅の小さな庭がフィールド。
 - ・花の咲く順序を調べる。
- 2) それぞれの人々にとって、私の庭はミクロコスモス。
 - ・インタビュー調査。





ワークショップ「道幅を測る」

3. 南青山4丁目の猫

- 1) 猫の行動調査
 - ・猫は、いつ、どこで、何をしているか。(イラストと説明文で表現)
- 2) 今は亡きなつかしい猫たち
 - ・猫を介して行き来する近所隣り同志の座談会。
- 3) 野良猫の話
 - ・エッセイ

4. ゆかりのある文学者と作品の背景

- 1)500平方メートルの範囲に住んでいた(住んでいる)5人の文学者の住居の場所と、略歴、作品について調べる。
- 2) いつごろ、どのくらいの間住んでいたか(住んでいるか)年表を作成。

6. 住環境指標を活かした新たな住民合意形成の展開と実践(継続2年目)

建築協定をきっかけとする街並づくり支援ハウス

(東京都世田谷区)

1. 活動の到達と、評価

私たちグループの1994年度活動のテーマは「住環境指標を活かした新たな住民合意形成の 展開と実践 | であり、これまでの活動成果を活かしつつ、

- 1) 建築協定の期限切れや更新地区等での環境パターン(小冊子)の適用活動
- 2) 行政や他組織とのまちづくり、パートナーシップづくり
- 3) 「規制から創造へ」の具体的な試みとしての建設シミュレーション

以上3点を活動目的として申請書に記入しました。

この1年を振り返るならば、全体テーマである 《新たな住民合意形成の展開と実践》 については、所期の目的を達成したのではないかと総括・整理しています。

これまでの私たちのグループの活動は、建築に係る紛争が生じてからの各地域との連絡や相談活動、あるいはこれに関わる事項が主でありました。建築協定という法律で定められた手法をいかに現代的に活用できるか? 技術論、さらに運動論も含め試行錯誤を繰り返し、それなりの対応パターンをつくりあげてきたわけです。それを、前年度において、「規制から創造へ」とコンセプトを少し広げ、どういうあり方ができるのかの模索の中で、「環境パターン」という小冊子を作り出し、運動を発展させてきたのです。

1. 規制から創造へ、住民の方等と一緒になって取り組んだ

今年度は、それをさらに発展させて、世田谷の建築協定に関わる地域住民が反対運動の枠を乗り越え広くまちづくりとして活動ができるのか? 自分達のデザイン規範を作り出すことが本当にできるか? もしできるとしたら、どんな方法が適しているのか? といったことに対する大いなる試みを行ったわけです。

幸い世田谷区の方、まちづくりセンターの方の協力を得、そしてなによりも地域住民の方々と 多くの興味を持って頂いた方々の協力・共同作業によって開催した建設シミュレーションは、創 造へ向けた取り組みへの多くの共感とまちづくりの楽しさを伝える場として、成功をおさめたよ うです。 実は規格段階では、仮想の敷地ではなく現実の敷地を使ったシミュレーションをするため、地元住民の方が開催に協力してくれるか心配で心配で…。実際のところはそういうところから始まっているのです。机上のモデルシミュレーションなら、専門家さえ集めればあとはノウハウだけですが、住民の方と共同作業となると、対象地域の住民の方との信頼関係がなければできるものではありません。ここが一番精神的には大変だったところと言えます。しかし、地域の方々が快く受けとめて下さり、新たな住民合意形成の展開と実践という課題に対し、私たちの取り組んだ建設シミュレーションという方法が1つの解答を寄せてくれたように、今になってみると思います。



建設シミュレーションに そなえて模型づくり

2. 少しぐらいぶきっちょでもいいんです

はじめてこうした催しに参加された方は、「どうせならコンピューターグラフィックでやればよいと最初思った。しかし、写真を使った模型の方が親しみやすいし、なんといっても手のぬくもりと制作者の汗を感じるので、これでいいと思った。」「CGだと住民の人には馴染みがないし、それにやっぱり専門家の人たちはすごい、なんてことになると専門家と住民との間に距離ができてしまう。」というコメントを出されていました。瓢箪から駒ではないですが、確かに重要な視点です。

また建築設計の協力をお願いし、結局ハウスのメンバーとなってしまった方は、建設シミュレーションの作業を通して「個々のもの(住宅)は確かに私有財産であるが、それらが集まった街の表情である街並みは本来公共財産である。しかし、今の日本ではその観念はないに等しい。もし住宅の集まったものが公共財産ならば、街並みはそこに住む人々の共通の私有財産となるのではなかろうか。」なるコメントを寄せてくれています。

完全なシミュレーションより、「ともにつくりあげていくシミュレーション」が大切なんだと思います。

3. まちづくりは人づくり。これの実践も

また、活動目標に対する成果とともに、昨年に引き続き助成活動を続けたことが、支援ハウスメンバーを大きく成長させたことが本年度の極めて大きな成果だとも思われます。メンバーの多くは、日頃はいわゆるまちづくり活動とはほとんど接触をもってなかったり、興味はあっても実際の参加場面がなかったりした者たちです。それが、この1年で、それぞれが自分のまちづくり論を語るようになり、ハウスの活動も作業分担



京都の法律事務所を訪問しヒアリング

が円滑に進むなど、個々人・それに組織としても充実してきたのではないかと実感しています。

これは、今回の見聞を広める活動が結構役立ったのではと思い返します。たんに物見遊山ではなく、それぞれにまとめる作業を分担してレポート化することを前提としたため、メンバー1人1人の知見を広げ、住民参加型のまちづくりを考える際の貴重な経験となったようです。

ハウスの活動は、人づくりにもつながっているのではないかと思います。

4. 十分に出来なかったこともあります

しかし、当初活動目的としていても、十分にできなかったことも勿論あります。建築協定の更新地区等での「環境パターンの導入」については、相手方の協定委員長の考えとのギャップもあり、きちんとした取り組みが出来なかったのも事実です。また、職人さんたちとのネットワークということも念頭においていましたが、地元設計協同組合理事の方と東京土建の理事の方の協力を得るにとどまりました。公的組織とのネットワーク等は強化されつつありましが、地元組織との関係が今一歩というのが実態でしょう。

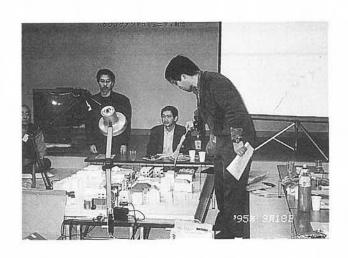
11. 今後の課題

今回の建設シミュレーションは現時点では大きな問題が起こっていないところでのまちづくりの取り組みであり、将来の問題を一緒に考え、対策を事前に考えておこうとの主旨でした。 次なるステップは、

今回の取り組みの経験を、実際のまちづくりで適用していくこと

であると思います。

建て替えを考えている方、まちづくりの機運があるところ、勿論建築トラブルの解決策の模索 のツールとしても、建築シミュレーションは有効ではないかと思っています。



建設シミュレーションの模様

世田谷まちづくりセンターの浅海さんは、今回の報告書作成にあたり、「今回は架空の建て替え計画を想定した実験でしたが、開発行為が実際に将来計画された時、街並づくり支援ハウスの主導のもと、地域住民と一緒に検討する場で活用され、その有効性が検証されていくことを期待しています。またシミュレーション装置の活用の可能性を伝えるPRビデオなどの製作が、当面ハウスとして重要になってくるのではと思っています。」なるコメントを寄せてくれました。

私たちも、全く同感で。「さあ~、次は実践だ。」と腕捲りしている今日この頃です。

7. 高齢化社会における新しい形のコミュニティの創設

福祉マンション研究会 (神奈川県横浜市)

1. 活動に至った背景

高齢化社会の一つの大きな課題である住居に関する問題では、バブル経済最盛期に立ち退きに合う老人世帯が、1990年ごろから、社会問題化してきた。特に、横浜市は独居老人に厳しい現実があり、市の施策の著しい立ち遅れが目立って来た。

横浜市の独居老人数は県下第一位であり、1988年時で16,001人であり、次に多い川崎市の約4倍にものぼる(人口比は約3倍)。この数字は10年前の3倍であり、このことから推定すれば、恐らくかなりの人数の借家独居老人がいると思われる。

1950年ごろから1970年にかけて、戦後復興政策や、高度経済成長期にかけて、首都圏への一極集中的な人口増加に伴い、公営住宅団地や民間業者による宅地開発が急速に進んだが、この時期の住宅がそろそろ老朽化しはじめ、建て替え時期を向かえている。

建て替えの多くは、老人の選ぶ木造住宅ではなく、家賃も高いマンションであるからである。 また、地上げに家を追われた老人達も、新たな木造アパートの入居は、老人であるが故に断られ るケースが多く、ましてや独居老人はなおさらの事である。

老朽化の為の建て替え時期とバブル経済成長の立ち退き騒ぎが同時期に起こり、現状の老人住 居の問題が発生している。

Ⅱ. 新しいコミュニティのはじまりを

シニア・りぶいん制度は、横浜市住宅供給公社が、民間の土地所有者の建設する住宅を借り上げて、国の地域特別賃貸住宅制度に基づき、低価格で貸し出す「よこはま・リブイン」制度の高齢者版である。

高齢者用住戸へ住まう人への市の対応は、生活指導相談員の配置と家賃補助に限られており、 高齢者が真に健康的に暮らせるシステムは用意されていない。高齢者や社会生活的弱者が隔離されて生活をするのではなく、一般の人々と「普通」に暮らせることが基本条件である。そのためには、使いやすいキッチン、トイレ、風呂場またバリアフリー構造を備えたハードの面と、社会サービスが付加され、住民がそれを利用し参加できるソフトを持つマンションの建設が必要であり、かつ周辺住民も含めて誰もが利用でき参加できる地域開放型の施設にするのが大事であろう。そのように考えた市民が自発的にボランティアで行動を起こし、また土地所有者の福祉にかける情熱を汲み取ろうとした。

恐らく日本にはまだ無い形態であり、ボランティア市民と民間土地所有者と行政サイドとの協力による、高齢化社会に向けての新しいコミュニティづくりに着手した。

Ⅲ. 建物のあらまし

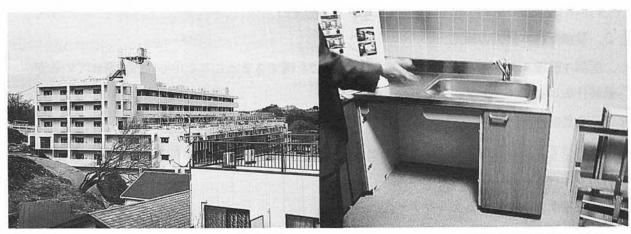
建設場所は大口駅より徒歩約15分、神奈川区西寺尾3丁目1823で神ノ木公園隣接である。 建物の概要は下記に箇条書きに記す。

- (1)建物は地下1階、地上5階建で、総床面積12,866.53 m²で、全戸135戸のうち43戸が高齢者用住居となり、高齢者人口は約60名を予定している。
- (2) 高齢者や障害者が使いやすいトイレ、台所、また介護 しやすい風呂場を作るが、その基本的な考えは高齢者 用の住居のみならず、他のすべてのファミリー世帯用 の住居にも適応させるようにした。全館バリアフリー を心がけた。
- (3)同じ建物の中でも高齢者用住居と一般世帯用住居とが 混在するように配慮すると共に、高齢者住居はすべて 接地面になるように配慮した。
- (4)高齢者用住居の部屋の前に約30㎡の多目的スペースを10箇所作った。これは福祉先進国北欧の福祉住宅に多く見られ、住居者の創意と工夫の暮らしが出来る交流スペースである。また、89㎡の集会室と、65㎡の談話ロビーがある。



浴室内

- (5) その他、診療所、鍼灸院、リハビリ室などが建物内に 設置され、合わせて約200㎡の「保健・治療・リハビリースペースが準備されている。
- (6) 横浜市よりLSA (ライフサポートアドバイザー) が $1 \sim 2$ 名つき、通いであるが、高齢者の日常の生活相談、安否の確認、緊急時の対応などを行う。



建物全景

高さ調節機能付キッチン

IV. 活動の実施内容

1. ネットワークづくり

人材確保と業務提携を中心に、「福祉マンションづくり」を通じて、かなりの強力なネットワークが作られた。医療部会では複数の提携の病院・診療所の医師達の協力確約、福祉部会では所属運動グループの団体による新たな企画などである。

2. 福祉ワーカーズの創設

福祉クラブ生活協同組合、生活クラブ生活協同組合などの協力により、「大口福祉まちづくり実行プロジェクト」が形成され、「介護ワーカーズ、配食ワーカーズの準備会」が発足し、本格的な活動に着手した。

3. キッチンの開発と浴槽の研究

松下電工との協力により、車椅子使用時にも10センチの調整が出来るキッチンの開発が成され、実用化に至った。同種の従来製品に比して非常に低廉で出来上がり、当マンションに設置できた。

また、どちらの片麻痺時にも使用でき、介護しやすい仕様の浴槽を選び同様に設置に至った。

4. マンション管理規約など、住まい方の提案

一般住人を含めたより良いコミュニケーションづくりの為の規約素案づくりを試みた。「住まい 方宣言」「ペット飼育細則(案)」である。

V. 未達成事項

いくつかの未達成事項があるが、以下に箇条書きに列挙する。

1. 診療所医師などの公募

現時点で2名の医師により、開所日数は週に4日確保出来ている。連日開所には更に1~2名の医師が必要である。

2. 診療所基本計画の策定

医師や医療スタッフの最終確保に至らず、現状で計画できるところを中心に作成されているが、 最終作成は主要スタッフが揃ってから行いたい。

3. 会員制度計画案

資金づくりと会員制のメリットを生かした健康管理を主眼としたが、医療法に抵触することが 判明したので、現在検討中である。

4. 在宅ケアー・ターミナルケアーの検討

先駆者グループの調査、ヒヤリング、講演会などを実施したが、上記医師不足のために、当診療所での実施は検討中の段階である。

VI. 今後の課題

今後の大きな課題は、将来のマンション住民自らがこのコミュニティづくり参画するようにするための仕掛けを、現在の「福祉マンション研究会」が如何に用意しておけるかである。

コミュニティづくりの為の市民の発意を、また世の中に未だ無い新しく価値有るものを作るにあたって当然出てくるであろう諸問題に対して、既成の作業に落としていくしか方法を持ち得ない役所に対峙するためには、当研究会がこのマンションに限っての福祉や医療を基本にした健康なシステムづくりを目指すのではなくて、この地域周辺を対象にした全体「健康まちづくり」のシステムを考慮しなければならない。共同組合員達による「大口福祉街づくり実行プロジェクト」が作られる所以である。

生活者の視点で生活をすること、また様々な面での真の健康な生活を求める行為そのもので、「行政の壁」を乗り越えなくてはならない。行政が市民生活のすべての面倒を見ることが出来ないことは、国内外でNGOやCBO等の市民運動の高まりのある今日に於いて、その存在理由を考えてみても周知の事実である。そのための新たな仕掛けづくりが、CBO (Community Based Organization) である福祉マンション研究会に課せられていると考える。

8. 「放置山林を高齢者の生き甲斐づくりに生かす活動」

逗子ハイランド一歩の会

(助成決定後、「逗子ハイランドまちづくり会」から名称を変更)

(神奈川県逗子市)

1. 活動に至った背景

私たちが住んでいる鎌倉逗子ハイランドは、昭和45年に分譲が始められた新興住宅地で、その範囲は、鎌倉市と逗子市にまたがり、現在は約1,700戸の大住宅地になっている。住宅地の東側は、《米軍家族住宅建設反対運動》で全国的に有名になった広大な池子の森に接し、南と西と北側も緑豊かな山林に囲まれ、周辺には鎌倉時代の史跡も多く、自然環境に恵まれた住宅地である。

しかし、一見、緑豊かに見える山林も、そのほとんどは、長い間、手入れもされずに放置されているため、樹木を立ち枯れさせるカズラやクズなどの蔓性植物や、アオキなどの日陰植物がはびこり、矢竹が密生して、山菜やキノコも生えず、昆虫も蝶々もいない、人が入り込めないほどの薮山になっているのが実状である。

Ⅱ. 活動の目的

平成4年9月、逗子市地域計画策定委員会の一つとして発足した 《逗子ハイランドまちづくり会》 の討議の中から、住宅地に隣接する放置山林の問題が浮かび上がり、このような放置山林を、地域住民が安心して入山できる新しいかたちの里山にするためにはどうしたらよいかが検討された。

平成6年3月、《逗子ハイランドまちづくり会》 の委託業務終了後、委員の有志を中心に 《逗子ハイランド一歩の会》 が結成され、「放置山林を、高齢者の生き甲斐づくりと健康増進の場として活用していきたい」という目的をもつボランティア活動に入った。

一歩の会は 《自主·自弁·無償を基本とするボランティアグループである》 《体力的に無理のない各自の力量に合ったボランティア活動をする》 《集まるのが楽しみな会にする》 ことを基本方針とし、会の名称には「千里の道も一歩から」という私たちの願いが込められている。

この活動には、行政と森林所有者の協力。山林活動に不可欠な、山靴などの装備。チェーンソー、山林用鋸、腰鉈、造林鎌、木鎌、唐鍬、根切り鑿などの用具や機材、山百合の球根、肥料の購入など、ボランティアだけでは到底賄いきれない資金も必要であった。この活動を円滑に進めて行くことができたのはハウジングアンドコミュニティ財団から、助成金を受けられたことが、何よりも大きな力になった。

Ⅲ. 活動の内容

一歩の会の主な活動場所は、鎌倉逗子ハイランド住宅地に隣接する放置山林であるが、そのほとんどは、長い間、人手が入らず、放置されたままなので、道の上まで矢竹が密生し、倒木で道がふさがれたり、道が崩れたりして、文字どおりの薮山になっていた。

一歩の会は、この1年間の活動で、放置山林の薮の切り拓き、倒木の除去、矢竹の伐採を実施 し、踏み後程度だった山の道を、お年寄りや子供でも、安心して利用できる森林浴健康コースと して整備した。滑りやすい急斜面7カ所に216段の石段と丸太階段を造り、矢竹を伐採したあ とには、神奈川県の県花である、ヤマユリを200株植えた。



矢竹を刈って道づくり



刈った後には昔の道標が

また、展望のよい場所にベンチを設置し、11カ所に案内板を立て、今まで薮で入れなかった、頼朝と政子ゆかりの衣張山や、頼朝や実朝、後白河法皇も辿ったという巡礼古道などの由緒ある歴史の道を、誰もが安心して歩ける安全なハイキングコースとして定着させた。

一歩の会の会員数は、現在16名で、男性が10名、女性が6名、最年長者は76歳、平均年齢は66歳である。

会員のなかに、山林に関係のある仕事をしてきた者は一人もいないが、本来「自然を相手に汗を流すことは楽しいもの」であり、意志さえあれば誰にでもできる活動であることを、身をもって実証したのではないだろうか。私たちが整備したハイキングコースと歴史の道の総延長は約6キロである。

IV. 結果と考察

『仕事が教えてくれる』という言葉がある。山仕事も同じであった。素人が初めて取り組む仕事ばかりであったが、やっているうちに、道具の使い方も、石段や丸太階段の造り方も、だんだん上手になった。その道のプロから見れば何とも頼りのない集団であるが、モタモタしていても、コツコツやれば、それなりに結果は出るものであり、『意志あれば道あり』で、老人パワーも、満更捨てたものではないと、仲間たちと自画自賛している。

逗子ハイランド一歩の会の会員が、この1年間の活動で学んだことは多い。素人の集団でも、「やれば、できるんだ」という自信が生まれ、自分たちにも信じられないような成果を残すことができた。

「これからの地域住民活動の一つのモデルになり得るものとして評価された」という、ハウジングアンドコミュニティ財団の助成理由に応えるためにも、この活動の輪を広げ、今後も努力を続けていくつもりである。



手づくりの道案内版

9. 荻ノ島かやぶき家環状集落の紹介・保全及び活用

荻ノ島わらじ会 (新潟県刈羽郡高柳町)

1. 活動の目的

荻ノ島集落は、中央に田んぽが広がり、それをとり囲むように、中門造りと言われる茅葺の 曲がり家が南叉は東向きに方向を揃えて環状に展開している。

田、畑、池、柿の木、神社、墓、背後の山林と茅葺の曲がり家が密接に景観に反映して、日本の農山村の原風景を保っており、これを地域外に紹介しながら、茅葺家の住人、地域内外の人々が協働して保全活動を推進する。

II. 活動の背景・内容

1. 背景

明治後期には、91戸の集落であったが、その後、減少の途を辿り、平成4年度末には43戸となってしまった。

この過程の中で、茅葺自体も姿を消し、20戸程が残るだけとなって、極めて厳しい状況となっていった。

昭和63年に発足した「荻ノ島わらじ会」は、環状茅葺集落の紹介、イルミネーション等明り イベントの実施、昔なつかし遊びの復活・伝承、神社御神木の大〆縄づくり、ホタル鑑賞案内、 他地域の活動グループとの交流などなど、地道に地域文化の見直し、伝承・保全、活性化に取り 組んで来ていた。

更に、平成4年度に町から、体験かやぶきの家を2棟整備してもらい、交流の進展に伴って集 落全体が第三者から高く評価され、地域の人々の意識が一段と高まる中で、荻ノ島わらじ会と一 緒に、維持・補修が大変な茅葺住家の支援を何とかしなければとの機運が盛り上がった。

2. 方法

茅葺家の保全は、文化財的役割のみ にウエートを置いて取り組むのではな く、生き生きとして、充実した生活の 場であることが基本であり、地域の 人々の自助努力を核に、地域内外のコ ミュニティを活発にすることで、「相互 理解の補修」をめざした。



荻ノ島の茅葺家

1) 茅葺屋根の補修・保全作業について

・4月16日~23日 茅葺家の各世帯と協議し、補修の方法及び規模、スケジュール等について方針を定めた。

・5月1日~8日 町内、塩沢地区より「茅」を60シメ購入し、荻ノ島集落入り口の共同車庫にストック。

· 6月13日~7月25日

7戸について、助成対象分・延べ21日、各戸自己追加分・延べ20日、茅葺職人をお願いして実施した。



茅葺屋根の補修作業

2) 茅葺家・村を語る集い

・7月3日 長岡市「荻ノ島かやぶき友の会」と集いを実施した。参加者、約35名。

· 7月23日

佐渡・羽茂町「はもちみらい塾」と集いを実施した。参加者、約40名。

- 3)紹介リーフレット作成
- ・5月22日~6月12日全国茅葺集落の勉強会を実施した。
- ・8月28日~2月20日紹介パンフレット検討会を実施した。
- ・3月31日

紹介パンフレット納品 (34cm×20cm、四ツ折、3,000部)

III. 活動から得た結論及び考察、今後の課題

今回の助成事業により、実際に、具体的に、第三者の「茅葺評価」にもとづいて、補修支援が 実施できた事は、大きな成果であった。

今まで、集落内では、「見すぼらしいもの」、「やっかいなもの」と思われていた「茅葺」に少し 自信も生まれ、茅葺に住んでいる人々に地域内でも応援しようという連帯感が感じられるように なって来たことと共に、その支援を素直に喜んで受けてくれた。

地域の外から、「やれ貴重な文化財だから! 景観だから! 地元は保全しなければ…!!」と 言われても、反発しか生まれないと思われるが、住んでいる人々が、自分の生活の場として、自 覚しながら、取り組むことが大切であると強く感じた。

今後の課題として、茅葺環状集落の保全は、地元のみでは限界があり、更に地域外の方々の広い理解を得るような息の長い「紹介活動」が必要であり、保全のためのコミュニティ協働基金、全国ネットワークが不可欠である。



10. ボランティアの活動拠点機能を持つ生涯住宅の建設活動

ライフケア研究会 (兵庫県神戸市)

1. 参加メンバー

神戸ライフケア協会、㈱タピス、関西大学馬場昌子氏、建築家で構成しています。

神戸ライフケア協会は、1982年から活動している団体でスタッフ50名、登録ボランティア800名で、高齢者のためのホームヘルプサービスや、痴呆高齢者のためのデイケアサービスや、各種福祉施設の研究とその広報等を行っています。活動の特徴は有償ボランティアであり、自らボランティアをした時間を蓄えられるという時間貯蓄制度です。

(株)タピスは、福祉住宅の建設販売をしているハウジング会社で、福祉機器の販売等も行っています、因みに社長は、社会福祉法人の理事長も務めています。

||. 活動の経過

生涯住宅建設の発端は、神戸ライフケア協会のデイケアセンターの使用期限が迫っていたことと、(株タピスが新しく生涯住宅のモデルハウス建設計画を立てたことによります。この計画は読売、神戸、朝日、毎日の各紙に取り上げられました。

西宮市にある民間のケア付アパート 「小さな木の家」を見学したり、大阪ガスの研究部及び京都大学の高田研究室の 調査・ヒアリングを受けました。

神戸ライフケア協会の主催した、突撃 ルポライター山井和則氏を迎えての市民 向け講演会に協力しました。これは、 (財) こうべ市民福祉振興協会の「市民 ふくし」No.56号に載りました。

1994年10月には、生涯住宅の建 設地が決まり、1995年5月設計完 了、12月竣工という予定で活動してい



「小さな木の家」の見学

ましたが、1995年1月17日の兵庫県南部地震により建設地の所有者が被災し、計画はストップしてしまいました。

1995年に予定していた福祉機器の実地検証と新たな提案という研究課題も中止せざるを得なくなりました。

Ⅲ. 計画の概要

建設地は、神戸市東灘区の既成市街地の中で便利であり、ノーマリゼーションの実現という点からも良い所でした。

規模は、木造3階建、延床面積250 m²です。用途は、1階を神戸ライフケア 協会のデイケアセンターとして、2・3 階を土地所有者の住宅として使い、全体 を(株)タピスが生涯住宅のモデルハウスと して使い、その代わり(株)タピスが建設費 を負担するという計画でした。



山井和則氏の講演会

設計主旨は、まず長寿社会対応型の構造・設備とします。建て替えなくても内外装の大規模なリフォームができ、設備もそれに対応可能なように階高に余裕を持たせます。そうするとライフステージの変化に合わせて、間取り等も変えることができます。

次に、アクセスフリーという概念で設計します。身体の老化・変化が起こっても、住宅内及び外部への移動の自由を保証しようというものです。例えば、廊下・階段幅を充分確保しておいたり、将来のエレベーター設置用のスペース・設備を用意しておいたり、手摺設置用の壁下地を作っておいたり、ドア幅や引戸の採用等に注意します。

安全性を追求します。例えば階段は登りやすい勾配とし、階下まで転倒しないよう折返し階段とし、段鼻を衝撃性の小さく弱視者によく見える色とする等です。火災に対しては、住宅用スプリンクラーを検討します。尖った角をなくしたり、床の仕上げ材の違いによる転倒防止に配慮する等細部に注意します。

快適性を追求します。上下階の遮音性を高める構造としたり、浴室の床タイルの冷たさへの配 盧等健康快適住宅とします。



当初の計画地

以上は計画の一般論としてですが、建 設地の決定が予定より遅れましたが19 94年12月に決まった段階で、その建 設地と所有者の家族のための計画とい う、言わば特殊解の検討と、それに並行 して進める予定であった研究が、震災に より中断のやむなきに至ったのは既に述 べたとおりです。

IV. 計画の意義

長寿社会対応住宅・ノーマリゼーションの実現。ボランティア団体とハウジング会社という民間団体・組織が以上の概念の住宅・施設を構築し実現するのはそう多くは見られない例と思われます。

竣工後の研究者による設計の効果測定。これにより、現在における福祉設計思想の点検・深化 が期待されます。

V. 今後

震災により計画が中断してしまいましたが、その後研究会ではもう一度土地捜しから再開しようということを決め、現在活動を始めています。

任意のボランティア団体への法人格授与ということが、国会レベルで取り沙汰されていますが、 社会のスムーズな運営のために、民間の多くの非営利法人組織を育成していくというこれからの 時代の風潮に乗っていくことが、神戸ライフケア協会に求められていると言えるかもしれません。

参考資料

第2回 「住まいとコミュニティづくり活動助成」審査講評 (平成6年3月)

1. 総評

今回の応募総数は70件で昨年度を上回った。応募者の活動の内容をみると住宅地の施設の提案や地域の住環境の整備に係る活動が過半を占めているものの、身近な環境の点検や自然の活用に係る活動等もあり、巾広く多様な提案となっている。また、応募者の活動地域をみると昨年同様東京を中心とした地域が多いものの、北海道から九州までほぼ全国に分布している。

審査にあたっては、地域の生活者の主体的活動で、その内容が先駆的・創造的であり、実現性・ 発展性のあるものが多くの審査員から高い評価を得た。また、昨年度にひき続いて2件が継続助 成となったが、いずれも地域の生活者のグループによる一年間の活動が高く評価されるとともに、 真に地域の住環境の改善整備に大きな役割を果たすと期待されたものである。

ところで、今回の応募には地域の生活環境の向上を図る上で有益であると思われる研究・調査・ 出版等の提案が少なからずあったが、都市計画等の専門家と地域の住民が連携して推進して行く ものであれば助成対象となり得たであろう。また、地域の活動をネットワーク化して行こうとい うプロジェクトも幾つかあったが、重要なテーマであり、財団の今後の検討課題としたい。さら に、すでに幾つかの助成を受けて立派な活動実績があり、当分の間自立して活動が継続できるよ うに見受けられる実力派の活動については、審査の過程でプライオリティを下げざるを得なかっ た。

応募いただいた全ての提案が、明日の日本の住まいづくり・コミュニティづくりに大いに役立 つよう、全国各地で多様な展開をしていくことを心から期待している。

11. 助成対象提案

1. 函館西部地区における「まちづくり公益信託」の展開

函館からトラスト事務局(北海道函館市)

<概要>

函館西部地区は、これまで町並み色彩の研究やリゾートマンション建設反対などのさまざまな住民活動の実績があるが、今後のまちづくりの最も大きなテーマとして歴史的町並み保存と住環境整備がある。そこで、昨年スタートした住民主体の基金である「公益信託函館色彩まちづくり基金」を活用して、まちづくり活動を展開させたいと考えている。ニュースレターによる情報発信、シンポジウムの開催、ワークショップを通じたまちづくりや町並み保存への提案などを行い、同時に、函館型の独自の公益信託の課題と可能性について探っていくこととしている。

<評価>

地域住民主体の活動で、今後も一層の拡がりとNPOへの発展性が期待される点が評価された。 その具体的手法として、住民の手によって住民の活動を支える公益信託という「しくみ」を創り、 その可能性を実際の活動を通して検討することは、全国のまちづくり活動の展開にとって大きな 意義があろう。そして、ファンドを生かしていくグループの立上り期ということで、時期的にも 重要な意味を持っている。

2. 環境共生型居住形態の実現をめざした研究・実践活動

つくばエコ・ビレッジ研究会 (茨城県つくば市)

<概要>

つくば市内の農村集落での環境学習会や農村居住の需要調査などを行ってきており、昨年度はエコ・ビレッジ (環境共生型居住形態) 構想案を市民会議で提案した。今年度は、エコ・ビレッジ の実現に向けて、地元懇談会やコミュニティ活動を通して基本計画を策定する。地元懇談会は集落住民の意識やニーズの把握を、コミュニティ活動は新住民のための環境学習を、目的としたものである。

<評価>

現在具体的な対象地域を決めて、エコ・ビレッジ実現のための活動段階に入っている。エコロジー関係の活動としては、専門家よりも市民が中心となっている点が評価された。また、既存集落のエコ・ビレッジ的な住まい方等、地域固有の特性を生かしつつ新住民のライフスタイルにあわせた家を造るという居住実験でもあり、都市近郊地域の共通テーマへの発展もありうる。

3. 花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で (継続2年目)

一花と緑のまちづくりセンター設立の試み一

「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会(茨城県つくば市)

<概要>

つくば市の公園内花壇づくりや個人の庭の手入れなど、実践的な内容を含めた女性庭師講座を開催している。女性庭師チームにより公園や地域の個人の庭の手入れを行う日本型NPOである「花と緑のまちづくりセンター」の設立を構想している。また、昨年度までの活動を継続し、「花と緑通信」を通じて講座受講者以外とも、新しい情報交換の場やネットワークの形成を進めることとしている。

<評価>

まちの中にある様々な庭すべてに公共性を認め、公園から個人の庭までを一連のものとして捉えている点、将来的には女性庭師たちがボランティア、応分の報酬で、またはプロとしてそれらの庭の整備を行うという様々な就業形態を試みようとしている等、ユニークな活動である。昨年度からの継続助成となるが、ここ当分の間は地域の活動の中心となる日本型NPOの構想実現に向けての重要な時期であるように思われる。

4. こまミュージアム創りによる遊び環境と生活文化の創造

高麗の郷エコミュージアム研究会(埼玉県日高市、飯能市)

<概要>

地域全体の自然環境・住環境・生活文化遺産等をそのまま保全し生涯学習の場として整備するエコミュージアム活動の中で、高麗の郷の名に関連する伝統文化であるこま遊びに着目し「こまミュージアム」を創る。「こまミュージアム」は単独の施設を意味するものではなく、地域環境や遊び文化を学習し保全・伝承して行く活動全体を指しており、路地裏や民家の軒先など町中でこまを回すことによって町をよく知り、こま遊びとまちづくり活動を連動させる。

<評価>

「こま」とまちづくりという発想のユニークさが評価された。発端は身近な自然環境の破壊に危機感を持った住民の集まりだそうだが、遊びとまちづくりを連動させるという明るい楽しい活動へ住民のエネルギーを転化していった様子から、これからも何か面白いことが起こりそうだという期待を抱かせる。

5. 暮らしと自然があるくヒューマン・スケール>のまちづくり

青山を研究する会 (東京都港区)

<概要>

都心にありながら車の入らない路地の状態を調査・記録してまちづくりに役立てるため、地図や 文学作品から地域の歴史を調べ、道の風向きや猫の分布などの現況も調査してコミュニティ・ マップに表現する。自分たちの住む地域には経済優先で失われたかつての東京のなつかしい情景 があり、ヒューマン・スケールのまちが残っている。建て替え時期にきている老朽家屋が目に付 くが、「外科手術的な再開発はこのあたりにそぐわない」との認識から、コミュニティ・マップ作 成後は優れた要素を保存しながら、住宅の修復・建て替えプランを提案する予定である。

<評価>

中心メンバーは「青山タウン・レポート」という地域誌の発行やシンポジウムの開催など活動の 蓄積があり、加えて地域への愛着とセンスの良さが評価された。地域のマップ作成という例は各 地で見られるが、猫の分布、花の咲く順序や道の風向きなどの身近で柔らかな調査から始めて、 単なるノスタルジーで終わらずに、建て替え・修復へつなげようという視点、さらに都心での活 動という点が期待される。

6. 住環境指標を活かした新たな住民合意形成の展開と実践(継続2年目)

建築協定をきっかけとする街並づくり支援ハウス(東京都世田谷区)

<概要>

建築協定の期限切れをきっかけに始まったこの活動は、昨年度は、創造的まちづくり指標の小冊子「環境パターン」を作成するため、住民へのアンケート、ワークショップなどを開催した。これからはその成果を活用し、建築協定制度を基軸としながら活動の場を広げるため、住民説明会、住民・専門家・行政等を交えた住民同士の支援体制づくり、建築協定地域での建設シミュレーションなどを行う。また、他の建築協定地域においても住民の合意形成が危機的状況であることから、活動の対象地域を広げて住民同士の支援体制づくりを目指す活動へと発展している。

<評価>

建築協定の期限切れをきっかけとする住民自身による住環境創造というテーマの重要性があり、それに取り組むグループの問題意識と目的、さらに手法のユニークさが高く評価された。昨年度からの継続助成であるが、世田谷区に限らず全国的にも重要な普遍的なテーマとして発展の可能性が大きく、前年度の活動が着実に成果をあげつつあることから、今年度の成果も大いに期待される。

7. 高齢化社会における新しい形のコミュニティの創設

福祉マンション研究会(神奈川県横浜市)

<概要>

高齢者向けの住戸を含む住宅供給公社による賃貸住宅の建設をきっかけに、地主を含めた周辺住民による生活支援のシステムづくりを計画中。横浜市からの補助もあるが、高齢者が健康に暮らしていくために在宅ケア、ターミナルケアを含めた地域医療による介護・リハビリ・養生療法などの支援をめざしている。現在、ある程度の準備は進んでいるが、実際にシステムとして動きだすために、患者・会員の健康管理や医療データのシステム、在宅ケアやターミナルケアの方法の検討、市民有志による福祉ワーカーズの創設などを行う。

<評価>

現在建設中の高齢者向け住宅を核として、ハードなシステムに留まらない新しい高齢者ケアのネットワークを創ろうとしており、問題意識がはっきりしていて実現性がある。志のある地主が中心となって、行政・住民・建築家・医療関係者など幅広いメンバーを集め、他の組織とのネットワークとコミュニティづくりの視点も盛り込んで進めようとしている点も評価できる。

8. 放置山林を高齢者の生き甲斐づくりに生かす活動

逗子ハイランドまちづくり会(神奈川県逗子市)

<概要>

逗子の新興住宅地をとりまく放置山林を、高齢者のボランティアによって手入れを行ない、高齢者の生き甲斐作りと健康増進の場として活用していくことを考えている。これまで放置され荒廃していた山林を、地域住民が安心して入山できる新しいかたちの生活林として位置付け、今まで埋もれていた歴史的な道を復活させ、ハイキングコースや散策路として整備する。また、栗の木の植樹を行ない、将来子供たちが栗拾いの楽しさを体験できる場所にしていきたい。

<評価>

新興住宅開発地において、宅地周りの林地整備は共通の課題であり、それを地域住民の自主的な活動によって行うところに意義があり、成果も期待できる。その取組み方も非常にユニークであり、高齢者の生き方と環境問題をうまく絡める一方、子供に虫取りの場を与えるという夢もある。これからの地域住民活動の一つのモデルになり得るものとして評価された。

9. 荻ノ島かやぶき家環状集落の紹介、保全及び活用

荻ノ島わらじ会 (新潟県刈羽郡高柳町)

<概要>

6年前の会発足以来、様々な活動を通して地域文化の見直し、伝承、保全、活性化に取り組んできた。昨年度は町が体験かやぶき家2軒を整備し、地域内外の人びとに楽しんでもらった。そこで、今後2年計画でより多くのかやぶき家を修理・保全して、かやぶき家の意義と再認識を促すこととした。また、荻ノ島環状集落の保全・活用に向けての地域内外の人々の理解・協力・支援を求めるため、リーフレットを作成する予定。

<評価>

住民自身で、住み続けながらかやぶき民家を保存する点で意義があり、具体的な成果が期待できる。個々の家を住み続けながら保存するために、コミュニティ活動を盛り上げ、集落全体がいきいきしてくることが期待できる。また、民家の修復というお金のかかることを支援することによってかやぶき民家修復の世論を盛り上げるきっかけになればと考えている。

10. ボランティアの活動拠点機能を持つ生涯住宅の建設活動

ライフケア研究会(兵庫県神戸市)

<概要>

10年以上にわたって高齢者に対するホームヘルプ活動を行ってきたが、その実績を生かして高齢者の終の住まいとしての「生涯住宅」の研究・提案を行ない、実際に生涯住宅のモデルハウスを設計・建設することを目的とする。これは、高齢者の地域ケアのためのボランティア活動拠点としても利用されるとともに、地域に解放して一般来場者に生涯住宅を体験してもらうというモデルハウスとしても意図されており、その成果は今後の活動に更に活かされていく。今回の活動としては、研究会の継続及び、ボランティア・利用者・地域住民の参加するワークショップ形式によって生涯住宅の設計を完了させるところまでを考えている。

<評価>

高齢者をテーマとした最先端的な社会実験として大きな意義があり、活動が実際の「ものづくり」に結実する可能性が極めて高いところから、その成果が期待される。ソフトの蓄積が十分にあるので、それがハードに活かされることも期待したい。活動主体は専門家を中心に数多くのボランティアで組織されており、地域に対しても馴染んでおり、ボランティアの活動拠点というテーマも評価された。

第2回「住まいとコミュニティづくり活動助成」報告書 平成7年9月15日発行

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団 〒107 東京都港区赤坂 3 - 2 1 - 2 0 赤坂ロングビーチビル 4 階

TEL. 0 3 - 3 5 8 6 - 4 8 6 9 FAX. 0 3 - 3 5 8 6 - 3 8 2 3

禁無断転載

